

瓦版OOC新聞

第3号

2016年11月9日

発行者

大森氏おしやべり倶楽部

【鮎沢の御厨について】

永原慶二先生の「日本の歴史と御殿場」(御殿場市史編さん事業発足記念講演)、『市史の散歩みち』第2号)より

一、御厨ーいつ頃からあるのか
「御厨」とは伊勢神宮の御料地のことをいい、日本各地にある。

「御厨」という呼び名は、平安時代に伊勢の神領が各地に設定された頃から生まれた。(伊勢神宮の荘園のことを「御厨」と呼んだ。)

したがって、「御厨」は固有名詞ではなく、伊勢神宮に一つの贄(にえ)(神様へお供えする食物)を奉る所をさす。

贄には魚が多く(贄は魚をいう)、鮎沢では鮎が捕れたというのが発祥ではないかと想像的に推測できる。

二、鮎沢の御厨はいつ頃出来上がったか

資料文献上では、少なくとも鎌倉時代には出来上がっている。『神鳳抄』という伊勢

神宮の所領目録の中に「大治(大沼の写し違い) 鮎沢の御厨」と出ている。

さらに百年以上遡る十二世紀の初め(嘉承から永久年間)に鮎沢の御厨が大体出来上がっていた。御厨が各地に増えてくるピークが十二世紀の初頭の時点であった。

三、鮎沢の御厨は伊勢神宮にどのような関係を持っていたのか?

「実はたいした深い関係とはいえない。」

記録では、鮎沢の御厨からは内宮へ布を十反、外宮へ現作の(現に田圃で作っている)三分の一と布六反だった。

(本来ならば魚などの贄を奉るのだが、運搬に便利なもの、経済的な価値の広いもので布などの替えられた。)

四、鮎沢の御厨はどの辺にあったのか

鮎沢が地名で残っているくらいだから鮎沢が中心だろう。御厨を確かめる一つの便利

な手懸りは、伊勢神領には必ずある神明社(伊勢神宮の出張の宮)で、神明社がどの辺にあるかを調べると御厨の範囲もある程度推定がつく。

御殿場には沓間(くつま)と西田中にも神明社があり、したがって、だいたい沓間、西田中、今の御殿場の中心地域は鮎沢の御厨に入っていただろうと考えて差し支えない。

五、鮎沢の領主は誰か

御厨が平安時代に出来上がったとすると、誰か領主(年貢を取り立てる者)がいるはずである。

「伊勢神宮がこの地域を領地にしていただけだから、伊勢神宮が唯一の領主であったろうかと考えますと、私はどうもそうではないと思います。」

「御厨として伊勢に出すものは割合に少なく、布を内宮に十反、外宮に六反、あと土地からのもの(地利)がありますが、これも普通の年貢かどうかわからないので、お初穂のようなもので、おそらく稲

をいくらかというようなことだろうと思われれます。」
「そうしますと、伊勢神宮だけがその時代の領主だったとはいえないのであって、もつと基本的な領主、一番税金を取る中心の領主がいたんじゃないか。」

「おそらく、伊勢神領であると同時に、主要な税金に当たる年貢の部分は、その国に出すか、それともどこかの荘園になつていて荘園領主に出していた。荘園領主はまだまだはつきりわかりませんが、どちらかに相違ないというふうには私では考えるのです。」

それではどうして文書資料が残っていない場合の荘園領主などのことを調べるか。(直接有効な一般的な意味での手懸り方向というものはない。)

六、大森氏の登場

十五世紀に入る頃から、この地域では大森という領主が登場してくる。一岡神社の「二岡神社文書」が残っている。

おそらく大体十五世紀は大森氏が一番実質的な領主で、荘園領主とか伊勢神宮との関係は全くなくなってしまったかというところは言い切れない。形式的には残っていただろう。
(あお)